あいち女性輝きカンパニー特集

固定観念からの脱却が持続的な成長への鍵

意識の変容が開く、「選ばれる愛知」の未来

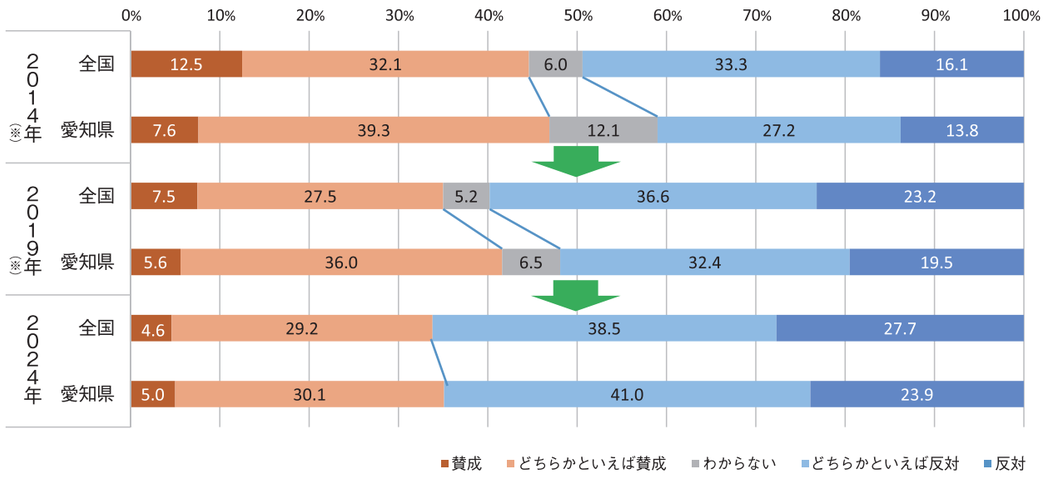
内閣府の世論調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方に対して「反対（計）」（「反対」「どちらかといえば反対」の合計）と答えた割合は、全国的に上昇傾向にある。愛知県も同じく、2014年から24年の10年間で「反対（計）」と答えた割合は増加しており、かつて見られた全国平均との意識の差も大きく縮まっている（図1）。

男女ともにすべての年代で「反対（計）」が「賛成（計）」（「賛成」と「どちらかといえば賛成」の合計）を上回っているが、特に若年世代ほどその傾向は顕著だ。18～29歳では女性の約8割、男性の約7割が反対の姿勢を示している。この意識の変化は、希望するライフコースにも色濃く反映されている。未婚若年層において、男女とも「専業主婦コース」は大幅に減少した一方で、「両立コース（子どもを持ち仕事も続ける）」が「再就職コース（いったん退職し子育て後に再就職）」を抜いて最多となった（図2）。誰もが個性を発揮して活躍できる社会の実現に向けて、固定的な性別役割分担意識は、今や大きな変容を遂げつつある。



固定的な性別役割分担意識の変化

（図1）「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対する意識

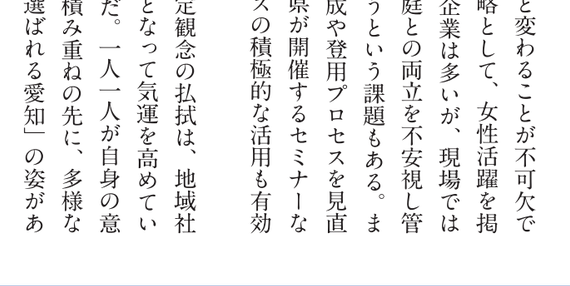


（※）2024年には「わからない」の選択肢がないため、2014年および2019年と2024年の数値を単純に比較することはできない。
資料：（全国）内閣府「女性の活躍推進に関する世論調査」（2014年）、「男女共同参画社会に関する世論調査」（2019年、2024年）を用いて愛知県男女共同参画推進課作成（愛知県）
愛知県「2014年度第３回県政世論調査」、「 男女共同参画に関する意識調査」（2019年、2024年）を用いて愛知県男女共同参画推進課作成

（図2）若者の意識 ライフコースの希望の推移

選択肢に示されたライフコース像は次のとおり。「結婚せず、仕事を続ける」（非婚就業コース）、「結婚するが子どもは持たず、仕事を続ける」（DINKSコース）、「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」（両立コース）、「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ」（再就職コース）、「結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない」（専業主婦コース）





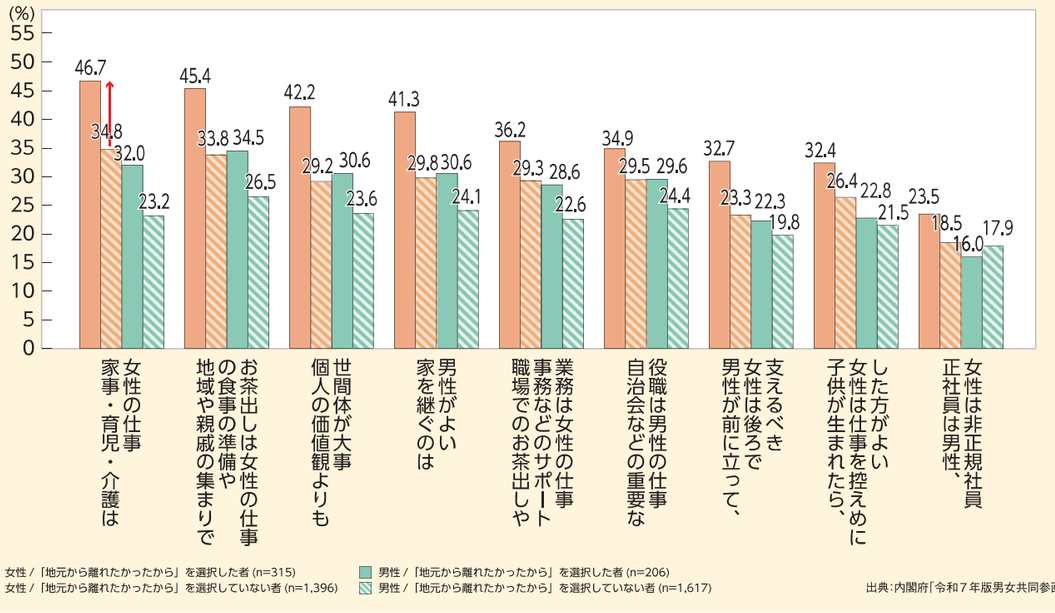
出典：内閣府「令和７年版男女共同参画白書」

（図3）出身地域における固定的な性別役割分担意識などと地元から離れたいという意識の関係（自分の都合で出身地域を離れた者）

1. 回答者は18～39歳の男女。

2.「中学校卒業時点であなたが住んでいた地域で、下記のようなことはありましたか。最も当てはまるものをお選びください。（それぞれ１つずつ）」と質問。選択肢は、「よくあった」、「時々あった」、「あまりなかった」、「全くなかった」、「わからない」。このうち、「よくあった」と「時々あった」の計を表章。

3. 自分の都合（進学や就職など）で、中学校卒業時点に住んでいた地域から転居し（離れ）たと回答した者に対し、「あなたが、自分の都合で、中学校卒業時点に住んでいた地域から転居した（離れた）理由を教えてください。（いくつでも ）」と質問。「地元から離れたかったから」を理由として選択した者と、選択していない者の回答を比較。



出典：内閣府「令和７年版男女共同参画白書」

女性や若者の定着に向けて選ばれるための地域づくり

総務省の「住民基本台帳人口移動報告（25年）」によると、日本国内の人口は地方から東京圏への流出が依然として続いている。その背景として推測されるのが、個人の意識変化とは裏腹に実態として地方に根強く残る固定的な性別役割分担意識の存在だ（図3）。この東京一極集中を止めるには、若年世代の価値観の変化を踏まえた社会づくりが急務である。「あいち男女共同参画プラン2030」でも「女性・若者に選ばれる地域づくり」を基本的施策の一つとし、県内企業の魅力や住みやすさを発信している。ほかにも女性の起業支援の拡充や、休み方改革を推進し、若年世代の定着と還流につなげていく。

働き方のアップデート 地域全体で高める変革の気運

魅力的な地域づくりは行政の施策だけで完結しない。受け皿となる企業が、働き方や評価軸を刷新し、誰もが活躍できる環境へと変わることが不可欠である。経営戦略として、女性活躍を掲げて実践する企業は多いが、現場では経験不足や家庭との両立を不安視し管理職をためらうという課題もある。まずは自社の育成や登用プロセスを見直すとともに、県が開催するセミナーなど公的リソースの積極的な活用も有効な一手となる。

こうした固定観念の払拭は、地域社会全体が一体となって気運を高めていくことが重要だ。一人一人が自身の意識を問い直す積み重ねの先に、多様な人材が輝く「選ばれる愛知」の姿があるはずだ。